

形の背がく片は小さく通常1脈を持つ点などが共通であり、同一種と考えられる。しかし、3地域の植物は、表1で示した様に、葉形、鱗片状の茎葉の数、苞の長さ、花の大きさ、花被片の形などでそれぞれ特徴があり、3亜種として取り扱うのが適当である。西南日本の植物はかつて堀田満氏がキソチドリの葉形の変異を論じた時注目されたものであるが、この植物は上述の様にキソチドリではなく *P. stenoglossa* に類縁がある。この新亜種名は特異な植物があることに気づかれた堀田氏を記念し、また、和名をソハヤキトンボソウとする。

○高等植物分布資料 Materials for the distribution of vascular plants in Japan  
103 アリモリソウ *Codonacanthus pauciflorus* (Nees) Nees 筆者は1978年11月30日、宮崎県日博市油津においてアリモリソウを採集したのでここに記録しておく(証拠標本: J. Murata no. 7016 in TI, KYO, TUS)。生育地は海岸沿いの国道に面したスギの植林下で、約 100 m<sup>2</sup> にわたり多数の個体が見られた。従来アリモリソウの分布はその北限が屋久島・種子島であるとされており、今度の記録は九州本土から始めて正式に報告されるものであると思われる。なお、国内の各ハーバリウムに所蔵されている標本を再調査したところ、鹿児島大学農学部にはすでに1911年に鹿児島県志布志で採集された標本(山岸亮 s.n.)があることがわかった。これら2つの記録により、南九州の東側海岸付近には古くからアリモリソウが自生していたと考えることができる。

(東京大学理学部附属植物園 邑田 仁)

□林弥栄: サクラ100選 グリーンブックス61, pp. 128, pls. 8, 1980. ニューサイエンス社、東京、¥850。著者は浅川実験林に国営の「サクラ展示林」の造成第一期に直接育成にタッチした人である。日本のサクラの種々を花を第一に、葉を第二に注目して分け、それを命名規約に従って分類し、列記したものである。ヤマザクラには *Prunus jamasakura* Sieb. が使ってあり、大部分の品種は cv. に扱われている。新しい分類が色々に出ており、ソメイヨシノがオオシマザクラの紅色系花一重咲きに出ていて *Prunus × yedoensis* Mastsum. cv. *Yedoensis* となっているなど、近頃まとまった見方として問題になるだろう。

(前川文夫)

□牧野富太郎: 植物知識 pp. 122, 1981. 講談社、東京、¥360。本書は昭和24年に通信省から「四季の花と果実」と題して発表されたものを改題したもの。花にボタン以下18篇、果実にリンゴ以下4篇を牧野調で種々論じたもの。読者を素人として一気呵成に書かれた。あとがきで植物は一つの宗教であると呵破している。終りに伊藤洋氏が注をつけ、また「牧野富太郎博士のことなど」として一般説とは違った坦々たる見方をしているのは意義が深い。

(前川文夫)